

霞が関。行政機関が建ち並ぶこの地を日本の中核として知らぬ人はいない。しかし、実はこの地に庁舎が集中したのは昭和初頭、関東大震災からの復興期のことである。その最前線に立っていたのは大蔵省営繕管財局。同時期に国会議事堂の建築も担っていた、営繕の中心組織である。今回紹介するのは、復興を経て現在の姿に至る霞が関と、その第一線で活躍したひとりの偉人である。

官庁建築の中心人物として首都の公共空間を設計した偉人

大熊喜邦

Yoshihumi Ohkuma

「二八七七年（一九五二年）」



明治10(1877)年、大熊喜邦は東京で元幕臣の家系に生まれた。明治36(1903)年に東京帝国大学工科大学(現・東京大学工学部)建築学科を卒業し、その後は大学院に在籍しながら建築設計事務所に入所して実設計に携わるようになる。

経験を積んだ大熊はやがて、国家の中核で活躍の場を得る。明治40(1907)年に大蔵省臨時建築部の技師に就任した彼は、後の国会議事堂建築を見据えた各国議事堂建築の調査にあたる。大正7(1918)年からは臨時議院建築局工営部で調査課長兼工務課長を務め、以後、議事堂建築計画の中心で尽力する。そして関東大震災後は焼失した各官庁舎等の復興を担う大蔵省営繕管財局に所属。同局所掌の官庁建築をけん引し、国会議事堂竣工の翌年・昭和12(1937)年まで官庁営繕に従事した。

大熊は壮年期を中央の技師として過ごし、数々の公共建築を手掛けた。その最大のものは国会議事堂であり、最終的には大熊が営繕管財局工務部長として完成まで導いた。加えて、震災からの帝都復興に際しては、その中心である営繕管財局を率い、警視庁や文部省といった国の重要な官庁舎を手掛けた。

退官後の大熊は以前から取り組んでいた学問に注力し、『東海道宿駅と其の本陣の研究』(1942年)など、江戸時代の交通経済や建築に関する研究を重ねる。昭和18(1943)年には経済学博士号を授与され、昭和27(1952)年に75歳で没した。



昭和5(1930)年頃、霞が関官庁街の風景。関東大震災により庁舎の大半が焼失し、官公庁は仮庁舎での執務を余儀なくされた。やがて本庁舎建設を担う大蔵省営繕管財局が組織され、大熊も所属。新庁舎は昭和初頭に次々と竣工していった。写真奥には建設中の国会議事堂も見える。(写真提供：一般社団法人 ジャパンアーカイブズ)

関東大震災は帝都・東京へ筆舌に尽くし難い被害をもたらした。多くの中央省庁が庁舎を失い、大手町の文部省はじめ各省庁は仮庁舎に身を寄せ復興に尽力した。

やがて昭和に差し掛かる頃、当初の混乱も半ば収束し、官衙(官庁舎)復興の時が来た。そこで大正十四(一九二五)年、営繕を担う大蔵省営繕管財局が発足した。同局には営繕工事全般を担う工務部が置かれ、なかでも工事計画や設計を担う工務課の長に大熊喜邦が就任。それから程なくして、官衙建築に係る計画が始動する。

計画が進むなか、文部省庁舎は昭和八(一九三三)年に竣工し、文部省が霞が関に移転。東京各所に分散していた他の省庁も当地に集結、霞が関官庁街が形成された。

官僚だった大熊個人の活躍は鮮明には伝えられていない。だが文部省庁舎は同時期に竣工した他の官衙と共に彼の功績に数えられる。設立当初から営繕管財局で尽力し、昭和二(一九二七)年には自身が工務部長となって組織を率いた大熊は、いわば東京復興の最前線に身を置き続けた立役者なのだ。

新庁舎が建ち並ぶ霞が関は勇壮な都市の姿を見せた。それは西欧に比肩する首都を目指す、明治以来の都市計画の実現だった。震災を機に本格化した官庁街整備はここに結実し、やがて昭和十一(一九三六)年の国会議事堂竣工で大成する。それは大熊が携わった一連の事業の終着であり、今日に至る政府の姿が現れた、日本の新時代の始まりだったのである。



現在の旧文部省庁舎は隣接施設と共に再開発地区「霞が関コモンゲート」を形成。文部科学省に加え民間企業が入居する同地区は、官民共存という新しい都市の先導的モデルだ。官庁街形成を象徴したこの建物は、今再び新しい霞が関のシンボルとなっている。